

福岡県教員養成史研究(六)

平 田 宗 史

(1980年9月8日 受理)

(一) はじめに

文部省は、明治40年4月17日、これまでの師範学校に関する関係規則を包括的に規定した『師範学校規程』を制定した。この規程によって、わが国の師範学校制度は、大幅に改正された。

福岡県においては、『師範学校規程』に基づき、明治41年3月、『福岡県師範学校学則』を制定し、師範学校制度の改革を行なった。その後、学則の小改正が行なわれたけれども、大正14年4月1日制定の『師範学校規程中改正』までは、大幅な改正は行なわれなかった。

本稿は、前稿の小倉師範学校の検討につづいて、明治41年から大正14年までの福岡師範学校の実態を考察する。

(二) 福岡師範学校の施設および組織

小倉師範学校の設置により、「明治四十一年四月一日より福岡県師範学校ヲ福岡県福岡師範学校ト改称」⁽¹⁾されることとなった。明治41年6月現在の敷地総坪数は、16,064坪6合5勺で、その内訳は、校舎敷地11,146坪9合6勺、運動場3,280坪8合5勺、農業実習場1,636坪8合4勺である。建物総坪数は、3,688坪2合、その内訳は、本校舎924坪6合、寄宿舎1,509坪6合、附属小学校475坪5合、農舎37坪である。⁽²⁾敷地総坪数、建物総坪数とその内訳坪数は、その後も、ほとんど異同がなかった。

校務は、「学校長之ヲ掌理スルト雖モ其教務ニ関スルモノハ教諭助教諭之ヲ分掌シ寄宿舎ニ関スルモノハ舎監之ヲ分掌シ事務ニ関スルモノハ書記之ヲ分掌シ附属小学校ニ関スルモノハ附属小学校主事及訓導之ヲ分掌スル」こととなっていた。そして、明治41年6月末日現在の教職員は、校長1人、教諭17人、教諭心得1人、助教諭5人、訓導12人、書記3人であった。⁽³⁾

学科は、大別して、本科と講習科に分かれ、さらに本科は、高等小学校から進学する第一部と中学校から進学する第二部と⁽⁴⁾、講習科は、小学校正教員の現職に在る者に必要なる講習を為す甲種講習科と尋常小学校本科正教員たらんとする者に

必要なる講習を為す乙種講習科と⁽⁵⁾に分けられていた。

(三) 福岡師範学校本科第一部の教育

明治41年3月の『福岡県師範学校学則』によると、本科第一部生徒は、「一般ノ志願者ヨリ募集」するのであり、薦生はいなかった。入学資格は、「修業年限三箇年ノ高等小学校ヲ卒業シタル者」であり、それを卒業していない場合は、検定を行なった上で入学を許可したのである。入学志願者の検定(試験)は、身体検査、学力試験および口頭試問の三種であった。そして、学力試験は予備試験と本試験があり、予備試験は、入学志願者所在の郡役所で、「学校長ヨリ送付シタル試験問題試験方法及時間割ニ依リ」、小倉師範学校、福岡女子師範学校と同日に行なうのであった。予備試験の学科は国語科(読方、綴方)、算術科(珠算ヲ除ク)、日本歴史科、地理科、理科、図画科であり、募集人員の1.5倍に当る者が本試験を受けるのであるが、本試験は身体検査、学力試験および口頭試問の三つが行なわれたのである。⁽⁶⁾

大正元年12月23日の『福岡県師範学校学則』の改正では、試験は本試験のみとなり、第一部入学志願者の検定は、男子は、福岡師範学校、小倉師範学校、中学明善校で行なうように改正されたのである。⁽⁷⁾

本科第一部の入学志願者数と入学者数をみると、表(1)の通りである。入学志願者は、明治44年から大正2年までは、定員の6～7倍で、かなり高い。しかし、大正3年から、次第に少なくなり、大正7年から10年までは、定員の2倍前後となり、入学志願者が激減したのである。福岡師範学校の方が小倉師範学校より、入学志願者が、やや多いが、小倉師範学校でもこの傾向が言える。これは、全国的な傾向でもあるが、師範学校入学志願者が減じた原因を、大正元年10月2日から7年10月19日まで福岡師範学校校長であった根岸福彌は、給費額が次第に減額されたことと、第一次世界大戦後、日本経済界の好況により、地味な、そして待遇のよくない小学校教員になろうとする者が少なくなったことなどを挙げている。⁽⁸⁾

表（１） 本科第一部の入学志願者と入学者（明治41年～大正13年）

年 度	明治 41	42	43	44	45	大正 2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
入 学 志 願 者	354	296	376	467	463	553	365	262	238	215	144	164	195	164	288	327	294
入 学 者	83	79	82	82	80	80	80	81	78	77	79	78	90	90	88	45	83

註 『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。

入学者の前歴をみるに、明治41年には、高等小学校及全補習科卒業者23人、准教員免許状受領者58人、其他2人、明治42年には、高等小学校及全補習科卒業者52人、中学校二学年修業者2人、准教員免許状受領者25人である。明治43年以降は、高等小学校卒業者とその他の項目しかないが、入学者の全部か大部分は、其の他の項目である。いわゆる、各郡に設立された准教員養成所卒業者か、そこを卒業し、准教員免許状を得た者が、多く志願し、入学したのである。⁹⁾

入学者の父兄の職業をみると、一般に言われているように、農家出身者が多く、全体の50%から60%も占めている。¹⁰⁾そして、「現に自分の学校の生徒の二分の一は、所得税年額拾円以上納むる家庭の出である。……………年額拾円の所得税は、之れを月給取りにすれば年俸四五百円の収入ある者で田舎では中流以上の生活を為して居るものである¹¹⁾」と、前掲の根岸校長は、明言している。

入学者の郡市別数を概観すると、全郡市から入学するけれども、宗像、鞍手、嘉穂、朝倉、筑紫、早良、糸島、浮羽、三井、三潞、八女、三池などの福岡県の中郡から南部にかけての農村部の郡出身者が多い。福岡市の出身者も、かなりいるけれども、明治から大正にかけて、だんだんと少なくなっている。¹²⁾

入学者の年齢をみると、それは、満15歳以上と定められていたが、最低15歳から最高21歳、平均

して16～17歳の者が入学したのであった。¹³⁾

表（２） 本科第一部入学者の年齢

年 度	明治 41	42	43	44	45	大正 2	3	4
最 多	20.3	20.2	20.5	19.9	20.0	19.0	19.9	19.7
最 少	15.1	15.2	15.3	15.2	15.2	15.0	15.4	15.2
平 均	17.5	17.0	16.7	16.6	16.9	16.9	17.0	16.10

註『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

入学者は、森有礼の制定した『師範学校令』によれば、全額支給制で、学資の全部を県費で賄うものであった。明治20年代半までは、この原則が守られていたが、明治39年1月17日の県令第2号による『生徒学費支給規則』改正によって、一年生のみは、自費生となり、それ以外の学年の学資も減額されたのであった。¹⁴⁾それが、大正期の入学志願者が減じる原因ともなるのであった。

男子本科第一部の学科課程表¹⁵⁾は、表（３）の通りである。学科課程表は、大正14年4月1日、師範学校の修業年限が5年となり、大幅な改正がなされるまで、その骨組は変らない。明治30年代の福岡師範学校の学科課程表と比較すると、毎週の総時間数は34時間で変らない。しかし、英語、商業、法制及経済が新しく取り入れられた結果、体操、農業の時間数が減っている。

表(3) 本科第一部学科課程表

計	商業	農業	體操	音樂	手工	圖畫	習字	經濟	物理	化學	博物	數學	地理	歷史	英語	漢文	國語	教育	修身	學科目	學年
三四			五	二	三	二	二				三	四	二	二	三	六			二	第一學年	
			遊戲、普通體操、兵式體操	單音唱歌	手工、天然物ノ模造、日用器具ノ製作	圖畫、寫生畫、臨畫、考案畫、幾何畫	楷書、行書				衛生、植物	算術、簿記、代數	世界地理ノ概要、日本地理	日本歷史	解音、綴方、讀方、書取、會話、習字	漢文講讀	國語講讀、文法、作文		道德ノ要領作法	時數	
三四	二	二	五	二	三	一	二		二	二	二	三	二	二	三	四	二	一	第二學年		
	商事要項	農具耕耘栽培養蠶、養畜、實習	遊戲、普通體操、兵式體操	複音唱歌、樂器使用法	手工、天然物ノ模造、日用器具ノ製作	圖畫、寫生畫、臨畫、考案畫、幾何畫	楷書、行書、假名		物理、化學	動物		代數、幾何、	外國地理	日本歷史、外國歷史	讀方、會話、文法、書取、習字	漢文講讀	國語講讀、文法、作文	心理	道德ノ要領	時數	
三四	二	二	五	二	三	一	三		三	一	三	一	二	三	三	四	一	第三學年			
	商業算術、教授法	農產製造實習、教授法	遊戲、普通體操、兵式體操、教授法	單音唱歌、複音唱歌、樂器使用法、教授法	手工、天然物ノ模造、日用器具ノ製作、教授法	圖畫、寫生畫、考案畫、教授法	行書、草書、假名、教授法		物理、化學、教授法	礦物、教授法	代數、幾何、教授法	人文地理ノ概說、教授法	地文ノ一斑、教授法	外國歷史、教授法	讀方、會話、文法、書取、習字、教授法	漢文講讀、作文、教授法	國語講讀、作文、教授法	倫理、教育ノ理論、教授法及保育法ノ概說	道德ノ要領、教授法	時數	
三四	二	二	三	一	三		二		四		二				二	二	九	一	第四學年		
	商業地理、重要商品、教授法	農產製造、農業經濟、森林實習、教授法	普通體操、兵式體操、教授法	單音唱歌、複音唱歌、樂器使用法、教授法	手工、天然物ノ模造、日用器具ノ製作、教授法	圖畫、寫生畫、考案畫、教授法	法制、經濟		物理、化學、教授法		幾何、教授法				讀方、會話、文法、書取、習字、教授法	漢文講讀、教授法	國語講讀、教授法	〔近世教育史、教育制度、學校管理法、學校衛生教育實習〕	倫理學ノ一班、教授法	時數	

大正2年4月現在、授業で使用した教科書は、表(4)の通りである。¹⁰⁾これらの教科書の外、「小学校教科書ヲモ準教科書トシテ使用セシメ」たのであった。¹¹⁾

師範学校の教授法は、「近時 初等教育界が自学主義教授法ニ重キヲ置キ来リタル結果師範学校ニ於テモ同様ノ教授法ニ則」ったのであった。大正2年には、『教授大綱』を定めているが、それによると、学科教授においては、「常ニ 訓育ニ留意

スヘシ」、「単ニ知識技能ヲ取得セシムルノミナラス同時ニ教授ノ方法ヲモ会得セシメンコトヲ務ムヘシ」、「生徒ヲシテ自学自習ノ習慣ヲ得シメンコトニ留意スヘシ」などの注意をするよう定めたのであった。¹²⁾

学科教授においては、大正新教育の影響を受けて、生徒の自主性、自学自習が重じられたのであるが、学科試験評価は、かなり厳しいものであった。試験は、大きく分けると学期試験と学年試験

表(4) 本科第一部使用教科書

科目	学年	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年
修身	吉田静致 範 修身教科書一	同上	同上	同上	同上
教育	小川 正行 佐藤熊治郎 新撰心理学 篠原 助市	同上	同上	同上	同上
国語及漢語文	吉田彌平 師範学校国文教科書一、二 国語漢文会、新篇漢文読本二 新村出 新定教科 日本文典	同上	同上	同上	同上
英語	熊本謙次郎 ニュー、スクール、リダーズ一	同上	同上	同上	同上
歴史	峰岸米造 師範学校歴史教科書 日本歴史 同 附 同	同上	同上	同上	同上
地理	山崎直方 普通教育 日本地理教科書 同 附 同	同上	同上	同上	同上
数学	高木貞治 数学教科書算術及代数 吉田好九郎 算術教科書 附 算術 同 同上	同上	同上	同上	同上
博物	安東伊三次郎 師範学校動物教科書 齊田、佐藤 師範学校植物教科書	同上	同上	同上	同上
物理及化学	同 同上	同上	同上	同上	同上
法及経済	同 同上	同上	同上	同上	同上
習字	未定	同上	同上	同上	同上
図画	図画共励会 図画教科書 師範用本 図一ノ巻一	同上	同上	同上	同上
手工	岡山秀吉 師範教育手工教科書	同上	同上	同上	同上
音楽	開成館 普通音楽教本 福井直秋 音程教本 陸軍省改正步兵操典 射撃教範 野外要務令	同上	同上	同上	同上
体操	同上	同上	同上	同上	同上
農業	草野正行 神戸正平 普通教育農業教科書上	同上	同上	同上	同上
商業	阪本陶一 実践商業提要	同上	同上	同上	同上

とがあったが、各学科の最高点を100とし、「各学科同五十点以上平均六十点以上ヲ得タルモノヲ修業又ハ卒業セシム但定点未滿ノ学科二科目迄ハ特ニ進級セシムルコトアルヘシ」¹⁰⁹と定められてい

表(5) 本科第一部の及第と落第の人数

		明治	44	45	大正					
		43			2	3	4	7	9	10
第1学年	及	78	81	75	79	76	78	73	88	86
	落	2	1	2	0	2	0	2	0	休 2 3
第2学年	及	78	74	77	77	75	72	75	76	77
	落	4	2	5	1	1	0	1	3	休 8 2
第3学年	及	69	76	71	77	76	73	70	66	76
	落	3	3	3	1	1	0	3	6	5
第4学年	及	75	64	75	75	77	69	71	69	57
	落	0	1	1	2	0	0	2	6	休 2 4

註『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。休は、休学を示す。

た。大正元年10月2日から大正7年10月19日まで
の間、福岡師範学校長をしていた根岸福彌は、「師
範学校は陸海軍の学校と同様に、国家興隆の基礎
として重大なる使命を帯びたる学校であるから、

私としての単なる利害損得で事を律すべき
でなく、国家に役立つ優秀なる教育家を作
ることを眼目とせられた様で、劣弱不良な
教師を作っては国運の前途に悪影響ある所
以と考えられ、劣弱者を救ふといふより優
秀者を益々伸すことを師範教育の本質とせ
られた。従って性行不良者や成績不振の者
又は身体薄弱な者は容赦なく進学落第に
処せられた。どの学年にも落伍者はあつ
た。¹¹⁰という。明治41年から大正12年ま
での本科第一部の退学者数をみると、つぎ
の通りである。表(6)をみると、かなりの
退学者がいる。退学者の理由をみると、其
の他の者が多いが、その大部分は、学業不
振者である。大正時代になると、師範学校
志願者が少なくなってきた、かなり学力の
低い者も入学させなければならなかった。
したがって、師範学校では、かなり厳しく
彼等を指導し、学業不振の者は落第させ、

表(6) 本科第一部の退学者数

年	度	明治 43	44	45	大正 2	3	4	5	6	7	9	10	11	12
疾 病	第一学年		1	4	1		2	1	1	1		4		2
	第二学年		1	2	1		1		1				1	3
	第三学年	1	1				3		1			2	3	1
	第四学年	1		1	1	1	2	2				1	1	
懲 戒	第一学年	2												
	第二学年		2			1				1				
	第三学年		1						1				1	
	第四学年		2						4				2	
死 亡	第一学年												1	
	第二学年		2					1		1		2		
	第三学年	3						1			1		1	3
	第四学年		1								2	1		
其 他	第一学年		1	2		2			1	3	2	1	1	
	第二学年		1			1	3		3	1			2	2
	第三学年							1	2		1			3
	第四学年		1				3	1	1		1	1		4
合 計		7	14	9	3	5	14	7	15	7	7	12	13	18

註 『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

退学させたのであった。そのためか、「落第をした不良な一生徒しかも在学中の生徒が寄宿舎本校に三回に亘っての放火、及びそれに真似てか二部在学中の一生徒の放火未遂」²⁴⁾事件が生じたのであった。二部生徒の放火は、火事の騒動にまぎれて、物品竊盗の意欲を満さむ為の単純な動機から生じたものであったが、三回の放火を行なった一部生の放火の動機は、「化学教諭某が、二年生某の化学成績に缺點を與へ、且落第せしめたから、化学教諭に対して遺恨をはらさん為、化学教諭の宿直の夜を選んで放火に及び以て責任問題を其教諭に惹起せしめ、且転任せしめむ為であった。」²⁵⁾と言われている。

(四) 福岡師範学校本科第二部の教育

福岡師範学校では、明治41年3月の『福岡県師

範学校学則』により、本科は、第一部と第二部に分れ、第二部を設置したのである。第二部入学は、中等学校卒業を原則とするものであるが、本科第二部生徒は、本科第一部生徒が一般の志願者より募集するのに対し、次の二種から募集したのである。

第一種 郡市長ノ薦挙ニ係ル者

第二種 一般ノ志願ニ係ル者²⁶⁾

しかし、「第二種ハ第一種ノ定員ニ満タサル場合ニ限り募集ス」²⁷⁾るのであって、第一種の郡市長の薦挙制を原則としたのである。

本科第二部の入学志願者数と入学者数をみると、表(7)の通りである。この表をみると、入学者数が、年度によって異なる。表(1)の本科第一部の入学志願者と入学者数と比較すると、本科第二部の入学志願者が、本科第一部の入学志願

表(7) 本科第二部の入学志願者と入学者 (明治41年～大正13年)

年 度	明治41	42	43	44	45	大正2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
入 学 志 願 者	52	86	116	111	107	156	98	101	110	99	93	110	118	194	206	276	339
入 学 者	40	71	79	80	80	80	64	64	62	60	64	76	77	80	76	112	106

註 『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

者より、かなり少ない。さらに、大正12年までは、本科第二部の募集定員は、本科第一部の募集定員と同じか、やや少ない程度であったのが、大正12年からは、福岡県は、第二部の定員を第一部より多くし、第二部を本体とする方針を出したのである。すなわち、大正11年の県議会での「師範学校の一部生を少なくして、二部生を多くする」と言うような御方針になっておると言うことを承りましたが、はたしてそうでございますならば、それに関する詳細の御説明を伺いたい。」²⁸⁾というある議員の質問に対し、参与員は、次のように、回答している。

「お答え致します。御尋ねの通り明年度から師範学校の卒業生の内容を、変更したいと思っておりますのであります。本年度は福岡・小倉の男子師範は、一部生を二学級、二部生を二学級募集し、女子師範の方は、一部生を二学級、二部生を四学級募集しておりますのでありますが、大正十二年度におきましては女子師範の方はその儘と致して置きまして、福岡・小倉の両男子師範の方は、一部生の募集を各々一学級宛少なくして、その代りに二部生を従来よりは一学級宛多く募集する、即ち三学級宛募集したい、こう思

っておるのであります。」²⁹⁾

このように、大正12年度から、福岡県の師範学校では、数的に二部本体となるのであるが、全国的な例に漏れず、二部本体とするか、一部本体とするかが、県議会で問題となったが、県は、大正12年から、二部本体とする方針を決めたのであった。³⁰⁾

第二部入学者の前歴は、大部分、中学校卒業者であり、その父兄の職業は、やはり、第一部と同じように、農業というのが多い。しかし、第一部と相違し、それは、全体の半数を占めておらず、第二部は、商業、公務自由業というのも多いのである。³¹⁾

第二部の入学者の年齢は、最低17～18歳、最高27～28歳であり、平均20～21歳である。第一部の入学者の年齢に比べると、平均して、3～4歳高いのである。³²⁾そして、本科第二部へ入学した生徒には、「在学中 学資トシテ 毎月男生徒ニハ金六円」³³⁾支給されたのであった。

本科第二部学科課程表³⁴⁾は、表(8)の通りである。この学科課程表の特徴は、総時間34時間中、教育が教育実習も含めて15時間も占めていて、しかも、それぞれの教科中に教授法の時間が

表(8)

本科第二部学科課程表

計	体 操	音 楽	手 工	図 画	及法 経済制	化理博 学及物	数 学	漢国 語文及	教 育	修 身	科目 学年 時毎 数週
三四	三	二	三	二	二	三	二	二	八 七	二	第一 学 年
	遊戯 兵式 体操 普通 体操 教授 法	単音 唱歌 複音 唱歌 教授 法	手 工 天然 物ノ 模造 日用 器具 ノ製 作 教授 法	図 画 写生 画及 考案 画ノ 補習 教授 法	法 制 経 済 教授 法	博 物 ノ 補 習 教授 法	算 術 簿 記 、 教授 法	漢 語 講 読 、 作文 、 教授 法	心理、 論理、 教育ノ 理論 歴史、 地理、 教育ノ 概説 近世 教育史 、 教授 法 学校 管理 法、 学校 衛生 教育 実習	道 徳 ノ 要 領 作 法 、 教授 法	

含まれていることである。これは、中学校卒業の者を入学させ、一年間で、小学校教師を養成しようとするもので、当然と言えば当然であろう。

本科第二部で、大正2年4月現在使用した教科書は、表(9)の通りである。

以上のような教科書を使用し、生徒の自主性を重じた教育が実施されたと言われているが、年によって異なるが、落第者もいる。何よりも、毎年数名、多い時には、十名以上の退学者がいる。特に、退学者の中で、疾病、其他すなわち、学業不振という理由で退学する者が多いのである。

(五) 福岡師範学校講習科の教育

明治35年12月27日の福岡県告示第410号の『小学校 男子 教員 講習科 規程』²⁹⁾で、福岡師範学校に、「小学校 教員ノ急需ニ応スルヲ以テ目的トス」る小学校教員講習科が附設された。そして、それは中学卒業生を入学させ、小学校本科正教員を養成しようとする甲種と、尋常小学校本科正教員を養成しようとする乙種に分けられる。

ところが、明治41年3月の福岡県令第10号『福岡県師範学校学則』になると、講習科は改正された。講習科は、甲種と乙種に分けられたのは変りはないけれども、甲種講習科は「小学

表(9)

本科第二部使用教科書

科目	学年	修身	教育	國語及 漢文	數學	法制及 經濟	手工	音樂	体操	備考
	第一 学 年	吉田静致 教師範 教育修身教科書 二部用	佐藤熊治郎 新撰教育學 篠原助市 新撰心理學 新撰理學 新撰各科學校教授法	吉田彌平 師範學校國語漢文教科書	安田綱太郎 再訂師範 簿記教科書	仁井田益太郎 中等教育法制汎論 全 中等教育經濟汎論	文部省 小學校 教師用手工教科書	開成館 普通樂典教本 吉田信太郎 オルガン規範教本 開成館 進行曲粹 ○福井直秋 音程教本	○陸軍省 改正步兵操典 ○全 射擊教範 ○全 野外要務令	○印ノアルモノハ參考書トス

表(10) 本科第二部生の及落の人数

年	度	明治 43	44	45	大正 2	3	4	7	9	10
及	第	77	67	79	68	59	59	57	71	78
落	第	0	8	0	1	0	0	1	3	4

註 『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。

校正教員ノ現職ニ在ル者ニ必要ナル講習ヲ為スモノトス」となり、現職教員機関化したのである。そして、それは定期的に、必ずしも設置されたも

表 (11) 本科第二部の退学者数

年 度	明治 43	44	45	大正 2	3	4	5	6	7	9	10	11	12
疾 病	2	2		3	2	3	2	2	1	2	1		2
懲 戒		3		5					1			1	
死 亡									1		1		1
其 他			1	3	3	2	2		3			1	1
合 計	2	5	1	11	5	5	4	2	6	2	2	2	4

註 『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。

ではなかった。⁹⁰ 乙種講習科は、「尋常小学校本科正教員タラントスル者ニ必要ナル講習ヲ為スモノトス」⁹¹と明記されているように、尋常小学校本科正教員を養成するものであった。

乙種講習科は、「在学中兵役ニ関係ナキ者」で、郡市長の薦挙者と一般志願者から募集したのであった。乙種講習科の入学志願者と入学者と卒業者数の変遷は、表 (12) の通りである。

表 (12) 乙種講習科の入学志願者と入学者と卒業生

年 度	明治 41	42	43	44	45	大正 2
入 学 志 願 者	64	53	97	120	115	
入 学 者	58	39	58	40	41	
卒 業 生	35	57	35	57	39	39

註『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。

乙種講習科入学者の前歴は、表 (13) の通りである。

表 (13) 乙種講習科入学者の前歴

年 度	明治 41	42
高等小学校全補習科卒業生	19	24
准教員養成所卒業生	2	0
准教員免許状所有者	37	15
合 計	58	39

註『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。

すなわち、准教員免許状所有者か高等小学校全補習科卒業の者が、乙種講習科に入学したのであった。その入学者の年齢は、明治41年、最多28.4歳、最少15.6歳、平均19.5歳、明治42年、最多23.8歳、最少14.3歳、平均19.2歳である。⁹² 明治

45年4月入学し、最後の講習科卒業生となった吉瀬狂介は、入学者の年齢および経歴が種々様々であったと語っている。

「同期生の年齢はなかなかまちまちで一番若いのが十六歳の私、最年長は四十歳（私の父よりも年上）の山口さん、次が三十三歳の児玉さんで、半分以上は二十歳以上の者

で准訓導、代用教員、郡役所、給仕、上等兵其他色々な経歴を有する者二十名斗り、他は殆んど予備校出身といった工合、それでも皆一様に制服制帽をつけて師範生活に順応するに伴い、漸次統一されたクラスが出来て来た様に思はれたのである。」⁹³

乙種講習科入学者の父兄の職業は、表 (14) の通りである。

表 (14) 乙種講習科入学者の父兄の職業

年 度	明治 41	42	43	44	45
農	36	24	37	29	26
工	4	2	1	2	2
商	4	5	3	1	2
庶	0	7	—	—	—
其 他	14	1	17	8	12
合 計	58	39	58	40	41

註『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

明治43～45年は、庶業という欄はない。

この表からみると、やはり、父兄の職業が農業である者が圧倒的に多い。

入学者には、「在中学資トシテ 毎月 男生徒ニハ金六円……………支給ス」⁹⁴ ることになっていた。

男子乙種講習科学科課程表⁹⁵は、表 (15) の通りである。明治41年3月の福岡県令第10号『福岡県師範学校学則』以前には、講習科は、やはり、甲、乙種に分けられ、修業年限1年であったのが、その学則では、講習科は、甲、乙の両種に分けられ、甲種は、第2部が出来たためか、不定期の現職教育機関となり、乙種は、同じ尋常小学校本科正教員養成を目標としながら、修業年限2カ

表(15) 男子乙種講習科学科課程表

計	体 操	音 楽	手 工	図 画	理 科	地 理	歴 史	算 術	国 語	教 育	修 身	学科目 学年 毎週 時数
三四	三	二	三	三	四	二	二	五	八	四	一	第一学年
	兵式体操 遊戯普通体操	唱歌	手工 簡易ナル手工	図画 自在画	博物ノ大要	日本地理ノ大要	日本歴史ノ大要	整数、分数、小数、諸 等数	普通ノ講読、作文、習 字	教育ノ大要	道徳ノ要旨	
三四	三	二	三	三	三	二	二	四	五	六三	一	第二学年
	兵式体操 遊戯普通体操	唱歌 楽器使用法	手工 簡易ナル手工	図画 自在画	物理化学ノ大要	外国地理ノ大要	日本歴史ノ大要	歩合算比例求積	普通文及小学校教科用 読本ノ講読、作文、習 字	教授法及学校管理法ノ 大要 教育実習	道徳ノ要旨	

年に延長されたのであった。この学科課程表の特徴は、総時間数、毎週34時間は変わらないけれども、国語の時数が、どの学科目よりも多いことである。

乙種講習科で使用された教科書を第2学年のみ掲げると、次の表(16)の通りである。⁸⁸⁾

乙種講習科入学生は、「皆よく真面目に勉強した。特に若い連中は卒業後直ちに小本正の検定試験を受ける覚悟で競って勉強した。」⁸⁹⁾ということである。しかし学業不振ということで、毎年1～2名の退学者を出したのである。⁹⁰⁾

明治23年の小学校教員講習科に源を発する乙種講習科、女子師範学校、小倉師

表(16) 乙種講習科使用教科書

手 工	体 操	音 楽	図 画	理 科	地 理	歴 史	算 術	国 語	教 育	修 身	科目 学年
文部省 小学校教師用手工教科書	○陸軍省 改正歩兵操典 射撃教範 ○全 野外要務令	吉田保太 オルガン規範教本	図画共励会 図画教科書 師範用本図三ノ巻一	宝文館 普通物理学教科書 龜高德平 普通教育化学小教科書	龜井忠一 師範教科 最近地理学 外国地誌及附図	下村三四吉 師範 学校 本邦史要 下	高木貞治 広算術教科書 下	吉田彌平 師範 学校 国文教科書講習科用	小川正行外二名 新選小学校管理法 小泉又一外一名 改訂小学校教授法 各教科	澤菊太郎外一名 講習科修身教科書 下	第二学年

備考 ○印ノアルモノハ参考書トス

範学校が増設され、明治41年から二部生制度も施行され、次第に小学校教員の需要を満たすことになった。さらに、大正3年から、二部生を増員することになり、講習科が廃止されることとなった。⁹⁰

(六) 福岡師範学校の寄宿舎の教育

師範学校に入学したら、「各部ノ生徒ハ寄宿舎ニ寄宿セシム」⁹¹ることが原則であった。すなわち全員入寮し、団体生活を送るのが原則であったのである。寄宿舎の実態は、明治20年代から殆ど変化はないけれども、大正時代になると、寄宿舎に関する規程は、より詳細に規定されたのである。舎務に関する諸則をみると、「甲、第一部寄宿舎ニ関スル規程」と、「乙、第二部寄宿舎ニ関スル規程」に分けられている。そして、前者は、舎務事務規程、編制、役員規程、役員会規程、日課、朝夕礼及人員検査、患者、清潔整頓及検閲、

黙学規程、夜警規程、外出及帰郷、炊事規程、間食規程、購買規程、積立金規程、呼集規程、雑則などからなるものであった。これに対し、後者は、「第一部寄宿舎規程ニ準」じたのであった。⁹²これらの規程によると、舎監は、庶務係、会計係、炊事係、購買係、衛生係、修繕係、備品係、警備係などを分担し、舎監の下に、「生徒全体ヲ生徒団ト称」する生徒団があった。その生徒団は、さらに、「分チテ若干ノ小団トシ更ニ之ヲ若干ノ学友ニ分チテ各自修室ニ配置」した。そして、上級生中より選任された小団長、学友長、炊事長、全副長、衛生係長、衛生係、修繕係長、修繕係、備品係長、備品係、購買係長、全副長、会計係長、全副長などの役員が置かれ、この役員を中心に寮生活は運営されたのであった。大正2～3年頃の寮生の日課は、つぎの通りであった。そして、当時の寄宿舎の様子を、以下の様に語っている。

表 (17) 日 課

月	起 床	朝 礼	黙 学	朝 食	就 課	昼食	放 課	夕食	黙 学	夕礼	消 燈
1, 2, 3, 10, 11, 12	午前 5時30分	6時20分	自 6時20分 至 7時	7時	8時	12時	午後 3時	5時 30分	自 6時30分 至 8時30分	8時 30分	9時30分
4, 5, 9 (自11日 至30日)	午前5時	5時50分	自 5時50分 至 6時30分	6時30分	7時30分	11時 30分	午後 2時30分	6時	自 7時 至 9時	9時	9時30分
6, 7, 9 (自1日 至10日)	午前5時	5時40分	自 5時40分 至 6時10分	6時10分	7時	12時	午後 2時	6時	自 7時 至 9時	9時	9時30分

「一体に其時代は皆さうであったが、殊に我が福岡師範は剛健な教育方針で、それが校風をなしてゐた。起床も就寝も始業も終業も合図は悉く軍隊式に喇叭であった。正月には必ず太宰府行軍をして、帰路は全校生徒五里の道を駆歩で帰って来た。之には先生方も走って随いて来られた。又三井郡の松崎地方に全校職員生徒一泊して兎狩を催すのが恒例であった。よく雪が降って積雪脛を没する中を、石油罐を叩いたり喇叭を吹いたり、喊声を挙げて追ひまわって他の組と獲物を争ふなど、如何にも青年の鬱積せる活気の発散には恰好の娯楽であった。雪といへば大雪の降った。朝は必ず全校生徒悉く武装して、西郊の愛宕山の頂上まで往復駆歩で行軍する事になってゐた。又生徒寄宿舎生活をしてゐたのは現時と同様だが、不時呼集といって、夜半突然非常喇叭に起され、武装の早く整った者

から順次に運動場に集合し、それから大濠廻りを駆歩でやっと帰って来るのが所謂不時に突発的に時々行はれた。」⁹³

以上のように当時の寄宿生活を語っているが、明治41年から本科は、一部と二部とに分れたため、一部生と二部生とは、あらゆる意味で、対抗的であった。そのため、教師は、それをなくすための努力をしなければならなかったのである。例えば、「二部生は来ル四月ヨリ師範一部生ト分離シ舎監ヲ特設」⁹⁴したり、「一部生ト二部生ト対抗的ノ競技ヲ避ケルヤウニスルコト」⁹⁵したりしたのであった。それでも、「二部生対一部生徒役員間ノ小紛議ニツキ臨時評議員会ヲ開ク」⁹⁶こととなった。

一部生と二部生との対立に、福岡師範学校が、昭和18年に、専門学校程度となり、それが廃止されるまで続くのであった。この外、当時の寄宿舎

生活で、注目すべきことは、福岡師範学校の厳しい教育方針に対して反抗して、前述したように放火事件が生じたことである。

(七) 福岡師範学校附属小学校と教育実習

「師範学校ニハ附属小学校ヲ設クヘシ」と、『師範学校規程』に定められ、福岡師範学校では、本校のすぐ側に附属小学校を設置していた。大正元年現在、福岡師範学校附属小学校の学級数は、尋常小学校8学級、高等小学校4学級、その教員は尋常小学校9人、高等小学校4人であった。この附属小学校で、本科第一部生の第四学年、第二部生、講習科生は、「児童教育ノ実務ヲ練習」⁴⁵⁾したのであった。その練習するものを教生と称したが教生は、「常ニ職員ノ監督ニ属シ総テ其指導ニ遵ヒ師表タルヘキ紀律ヲ守」⁴⁶⁾らなければならなかった。

教生の練習は、級属練習と一般練習とに分けられた。級属練習は、「或ル学級ニ属シテ当該学級ノ教授訓練等ニ関スル実務ヲ練習セシムルモノ」⁴⁷⁾であり、一般練習は、「教授訓練ニ関スル練習ヲ補遺センカ為メニ教生ヲシテ特別ニ教授ヲナサシメ職員及ヒ教生之ヲ参観批評スルモノ」⁴⁸⁾であった。さらに、一般練習は、甲乙丙の三種に分け、「甲種ハ職員及教生一同列席シ乙種ハ一部ノ職員及教生ヲ以テシ丙種ハ級属ノ訓導及教生ヲ以テスルモノ」⁴⁹⁾であった。そして、教授の終りには、批評会が開かれるのであるが、批評者の順序は、つぎの通りであった。すなわち、1. 教授者自己の批評、2. 教生の批評、3. 訓導の批評、4. 本校教員の批評、5. 学校長の批評の順序で行なわれる。⁵⁰⁾ 大正3年3月講習科最後の卒業生となった者は、教育実習の感想をつぎのように語っている。

「第三学期は教育実習期で所謂教生先生となった。私は尋一の教生で主任は織田訓導、愛らし

い無邪気な教子に接して、初めの間は恥かしい気がして居たが、馴れるに従って教育の楽しみを漸次味ふ事が出来る様になって来た。……教生期間中はなかなか忙しかった。甲種、乙種の一般練習、指導課業、訓導講話等々、日も短いので毎日電燈がついてから舎に帰って居た。」⁵¹⁾

(八) おわりに

これまで、明治41年から大正14年までの福岡師範学校の実態を考察してきたが、この時期の福岡師範学校の特徴は、つぎの通りであった。

一つは、明治41年に本科第二部が設立され、本科第一部との対立を生みだしたことである。

二つは、本科第二部の設置の結果、数的に、大正12年から、本科第一部より多く募集するようになり、福岡師範学校では、次第に本科第二部を本体とするようになったことである。その場合、師範教育を本科第一部を本体とするか、本科第二部を本体とするかの論議が生じたのであった。しかし、県議会では、その結着がつかないまま、主に、経済的な理由で、数的に次第に本科第二部本体となっていた。

三つは、福岡師範学校でも、大正新教育の影響を受け、生徒の自学自習を重じたけれども、大正元年10月2日から大正7年10月19日の間、その校長をつとめた根岸福彌は特に「師範学校は陸海軍の学校と同様に、国家興隆の基礎として重大なる使命を帯びたる学校であるから、私としての単なる利害損得で事を律すべきでなく、国家に役立つ優秀なる教育家を作ることを眼目とせられた様で、劣弱不良な教師を作っては国運の前途に悪影響ある所以と考へられ、劣弱者を救ふといふより優秀者を益々伸すことを師範教育の本質とせられた。従って性行不良者や成績不振の者又は身体薄弱な者は容赦なく退学落第に処せられた。」⁵²⁾ ことである。

(註)

- (1) 福岡県教育百年史編さん委員会編『福岡県教育百年史』第2巻 資料編(明治Ⅱ) 福岡県教育委員会 昭和53年3月25日 542頁
- (2) 『福岡県福岡師範学校一覧』(明治41年6月末日調) 150頁
- (3) 同上書 108～112頁
- (4) 同上書 6～7頁
- (5) 同上書 10頁

- (6) 拙稿「福岡県教員養成史研究」(五)『福岡教育大学紀要』第29号 第4分冊 昭和55年2月 66頁
- (7) 『福岡県公報』第21号 大正元年12月26日11頁
 大正10年の福岡師範学校・小倉師範学校・女子師範学校の生徒募集をみると、小倉師範学校本科第一部だけが試験場を小倉師範学校、福岡師範学校、中学明善校の三箇所としている。他は、志望校を試験場としている。(福岡県教育百年史編さん委員会編)『福岡県教育百年史』第三巻 資料編 大正昭和(1)
 福岡県教育委員会 昭和53年11月1日 350頁
- (8) 根岸福彌「師範教育に関する私見」『帝国教育』第418号 大正6年5月号 46頁
- (9) 『福岡県統計書 第二編 学事』明治41年～大正13年
- (10) 第一部の入学者の父兄の職業を図表化すると、つぎの通りである。

年度	明治41	42	年度	明治43	44	45	大正2	3	4	年 度	大正7	年 度	大正9	10	11	12	13
農	52	46	農	37	40	46	54	49	43	農 業	47	農 業	54	59	56	23	42
工	1	4	工	3	6		4	3	2	工 業	3	工 業	2			3	1
商	8	7	商	7	6	10	3	9	12	鉱 業		鉱 業	1		1		3
庶	4	17	其他	25	30	24	19	19	24	商 業	7	商 業	7	5	6	7	7
其他	18	5								漁 業		水 産				1	
										官公吏	3	公 務 自由業	17	25	14	6	13
										軍 人		交通業					
										会社員	2	其 他 有業者	9	1	11	2	4
										教 員	10	家 事 使用人					
										其 他	7	無職業				3	13

註. 以上の表は、『福岡県統計書 第二編 学事』より作成したものである。大正4年以前は、農、工、商、其他の四つの項目しかないが、其他の項目の中で多い職業は、学校教員で、3分の1以上を占めている。(『福岡県福岡師範学校一覧』の大正2年8月1日調と大正3年8月1日調による。)

- (11) 前掲論文「師範教育に関する私見」43頁
- (12) 『福岡県福岡師範学校一覧』(明治41年6月末日調、明治43年6月1日調、明治44年6月1日調、大正2年8月1日調、大正3年8月1日調)による。
- (13) 入学年齢と学業成績との関係を調べたものがある。それによると、17～18歳ぐらいで入学した者の成績が一番よく、一般に年齢が高くなるにつれて悪くなる。(『福岡県福岡師範学校一覧』(大正2年8月1日調) 189～191頁)
- (14) 拙稿「福岡県教員養成史研究」(五)『福岡教育大学紀要』第29号 第4分冊 昭和55年2月 67頁
- (15) 『福岡県福岡師範学校一覧』(明治41年6月末日調) 20～22頁
- (16) 『福岡県福岡師範学校一覧』(大正2年8月1日調) 81～83頁
- (17) 「師範学校生徒学資金ニ関スル調査書」(大正八年度)福岡県教育百年史編さん委員会編『福岡県教育百年史』第三巻 資料編 大正昭和(1)福岡県教育委員会 昭和53年11月1日 333頁

前掲の調査書によると、「書籍費ニ於テ次ノ表ニ示ス如ク師範学校ハ中学校等ニ比シ約倍額ヲ要」したという。中等学校生徒書籍費比較表は、つぎの通りである。

	福岡師範	小倉師範	女子師範	修猷館	工業学校	福岡高女	九州高女	筑紫高女
一 年	19,110	14,550	16,890	6,530	—	2,429	6,050	6,850
二 年	13,880	16,190	11,710	6,870	—	8,195	7,150	7,190
三 年	11,690	15,960	11,070	7,380	—	7,183	7,150	7,360
四 年	5,330	10,430	6,950	9,010	—	7,716	8,250	7,460
五 年	—	—	—	6,480	—	—	—	—
計	50,010	57,130	46,620	36,270	—	28,523	28,600	28,860
一学年平均	12,515	14,283	11,655	7,254	—	7,131	7,150	7,215
二 部	14,850	—	13,170	—	—	—	—	—

(18) 『福岡県福岡師範学校一覧』 大正2年8月1日調) 78頁

(19) 同上書 70頁

(20) 福岡県福岡師範学校 『創立六十年誌』 昭和11年12月30日 157頁

(21) 内外教育評論社 『内外教育評論』 第12巻 第10号 大正7年10月1日 36頁

(22) 福岡県議会議事録編 『^{詳説}福岡県議会史』 大正編下巻 福岡県議会 昭和32年6月1日 268頁

(23) 同上書 268～279頁

一部本体とするか、二部本体とするかは、大正元年10月2日から大正7年10月19日まで福岡師範学校長であった根岸福彌の前掲の「師範教育に関する私見」の中でも論じられている。このことから、大正初期に、すでに、このことが問題となっていたと思われる。

(24) 第二部の入学者の父兄の職業を図表化すると、つぎの通りである。

年度	明治 41	42	年度	明治 43	44	45	大正 2	3	4	年 度	大正 7	年 度	大正 9	10	11	12	13
農	25	39	農	33	38	41	34	28	30	農 業	41	農 業	44	39	32	52	42
工	0	1	工	4	4	5	8	1	1	工 業	1	工 業	0	2	0	0	3
商	5	5	商	8	18	3	6	11	10	鉱 業	0	鉱 業	2	0	0	2	0
庶	0	18	其他	34	20	31	32	24	23	商 業	7	商 業	4	5	11	17	15
其他	10	8								漁 業	0	水 産	0	0	0	0	0
										官公吏	5	公務 自由業	10	22	16	23	16
										軍 人	0	交通業	0	0	0	0	0
										会社員	0	其 他 有業者	17	12	17	1	0
										教 員	4	家 事 使用人	0	0	0	0	0
										其 他	6	無職業	0	0	0	17	30

註. 以上の表は、『福岡県統計書 第二編 学事』より作成したものである。

(25) 第二部入学者の年齢は、つぎの通りである。

年 度	明治 41	42	43	44	45	大正 2	3	4
最 多	27.0	28.11	27.10	28.10	27.2	25.6	26.3	24.0
最 少	19.1	18.8	18.4	18.00	18.5	17.1	17.9	17.2
平 均	21.7	21.7	20.0	20.06	21.2	20.4	20.3	20.0

註. 『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

- (26) 『福岡県福岡師範学校一覧』（明治41年6月末日調） 9頁
 (27) 同上書 24～25頁
 (28) 『福岡県福岡師範学校一覧』（大正2年8月1日調） 83～84頁
 (29) 『福岡県師範学校一覧』（明治38年3月） 9～18頁
 この考察は、拙稿「福岡県教員養成史研究」（四）『福岡教育大学紀要』（第28号 第4分冊）昭和54年2月 42～45頁
 (30) 『福岡県師範学校一覧』（明治41年6月末日調） 10～11頁
 (31) 『福岡県統計書 第二編 学事』による。
 (32) 前掲書『創立六十年誌』 303頁
 (33) 『福岡県師範学校一覧』（明治41年6月末日調） 13頁
 (34) 同上書 27～28頁
 (35) 明治41年から大正2年までの乙種講習科の退学者は、次の通りである。

年 度	明治 41	42	43	44	45	大正 2
退学者	1	2	1	3	2	0

- (36) 福岡県議会議事局編『詳説福岡県議会史』大正編 上巻 福岡県議会 昭和30年2月 152頁
 (37) 『福岡県福岡師範学校一覧』（大正2年8月）1日調） 38頁
 (38) 同上書 84～107頁
 (39) 前掲書『創立六十年誌』 153～154頁
 (40) 福岡師範学校『日誌』明治41年9月ヨリ
 (41) 福岡師範学校『教員会議記録簿』大正2年6月
 (42) 『福岡県師範学校一覧』（大正2年8月1日調） 113頁
 (43) 同上書 117頁
 (44) 同上書 118頁
 (45) 前掲書『創立六十年誌』 305頁